

地球の端っこで考えた

小塩哲朗

先日、ある川べりを散歩していた時のこと。一面にきれいな明るい黄色の花が咲いていました。元氣の出そうな良い景色だったので、その花の種類が分かって少しがっかりしました。外来種のおオキンケイギクでした。

オオキンケイギクは「特定外来生物」に指定されていて、法律に基づいて移動や栽培が禁止されています。観葉植物として日本に持ち込まれたものが野生化し、従来あった植物を駆逐しながら生育範囲を広げているようです。たしかにその川べりも昔はそんな景色ではなかった気がします。数年後が恐ろしいです。



オオキンケイギクの群落―愛知県内で

南極入りの際も嚴重調査

特定外来生物

外来生物とは、元はその土地にいなかったもののことですが、特に人間活動によって移動してきたもののことを言います。ある土地にどんな植物が生えているかというのは、何千年、何万年もかかって決まってきました。ところが、特に近代以降に自動車、鉄道、船、飛行機など、いわゆる文明の利器を使うようになると、人間や荷物にくっついて種が運ばれるようになりました。それ以前に比べて広い範囲に短い時間で移動することができるようです。これが、近年、外来種問題が大きくなってきた主な理由です。

南極も例外ではありません。観測隊へ参加する準備のための講義で学んだことですが、茎のあるような植物が一切生えていない昭和基地で、ある時にイネに似た植物が見つかったそうです。調べてみると、北極圏・アラスカで使った装備に種がくっついて南極まで運ばれ、そこで芽を出して生き延びたものだったので、もちろんすぐに駆除されましたが、それ以来、植物の種などがかばんやコンテナにくっついてきていないか、より一層嚴重に調べられるようになったとのこと。

環境汚染や地球温暖化も問題ですが、外来種はより身近な問題ではないでしょうか。人間が地球とその自然に及ぼす影響について、改めて考えさせられます。

(名古屋科学館学芸員)